

ニューズレター

第134号・2026年8月

日本カナダ学会

発行人：矢頭典枝 編集人：福士純・広瀬健一郎・岡田健太郎

事務局：〒662-8501兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155 関西学院大学国際教育・協力センター(CIEC)矢頭研究室気付
TEL:06-6878-8255 ・ <http://www.jacs.jp> ・ jacs@jacs.jp 郵便振替口座 00150-2-151600
(お問い合わせの受付：電話でのご対応は不定期となっておりますので、お問い合わせはメールにてお願い致します。)

第51回年次研究大会へのお誘い

古地 順一郎

今年度の年次研究大会は、2026年9月12日(土)・13日(日)の2日間にわたって愛知大学名古屋キャンパスで開催されます。開催準備を進めていただいている岡田健太郎実行委員長に心より感謝申し上げます。今回の大会も魅力あるプログラムとなっております。多くの会員の皆様のご参加をお待ちしております。

1日目は自由論題からスタートします。ノース・バンクーバーの日本庭園、カナダチャリティ法、映画『アンを探して』におけるカナダの言語的多様性、Doukhoborの歴史と、バラエティに富んだテーマを扱う4本の報告があります。午後はクイーンズ大学政策学部長のジム・ファーニー教授をお招きして「現代カナダのポピュリスト政治」と題した基調講演をしていただきます。日本を含めた各国でポピュリズムが台頭している中、カナダの現状について考える良い機会になるでしょう。基調講演後の「公教育におけるDEI」に関するセッションでは、障がいを持つ子どものインクルーシブ教育、性的多様性に関する教育政策、反DEI言説下での教育政策とバルネラブルな若者への影響を検討する、示唆に富む3本の報告が予定されています。

2日目は、午前中に2つのセッション、6本の興味深い報告が予定されています。まず、「文学」に関するセッションでは、ノヴァスコシア州スプリングヒル第二炭鉱の山はね事故を扱った作品、イヌイットのアーティストによる環境正義の表現、ケベック文学における人間と環境の関係をテーマにした3本の報告があります。次に「財政」に関するセッションでは、コロナ禍以降のカナダ財政をめぐる諸課題、移民政策分野における連邦・地方政府の財政支出、BC州におけるHSTをめぐるタックスレファレンダムに関する3本の報告が予定されています。午後のシンポジウムでは、日本の大学でカナダを教える意義と効果的な教育実践について考えます。神田外語大学、立命館大学、関西学院大学での事例をご報告いただきます。会員同士の情報共有・意見交換の場を創出することを目的としたシンポジウムですので、皆様の積極的なご参加をいただけますと幸いです。最後に、大会プログラムの立案にあたってご尽力いただいた企画委員、オブザーバー、開催校実行委員長、事務局の

(次ページに続く)

JACS Newsletter No.134 (August 2026)//本号の内容：●巻頭言：第51回年次研究大会へのお誘い(古地順一郎)●報告：ダン・ホーナー先生講演会『カナダにおける民主主義と政治文化』を開催して(福士純)●コラム：“道楽”としてのカナダ研究—ある歴史画への眼差し(竹中豊)●事務局より(第51年次研究大会のお知らせ、「トラベル・グラント」募集について、『カナダ研究年報』第47号(2027年9月発行予定)の公募要項、会費納入について(お願い))……………●編集後記

皆様に厚く御礼申し上げます。それでは、皆さん、名古屋でお会いしましょう！

(第51回年次大会企画委員長・龍谷大学)

＊

＜報告＞

ダン・ホーナー先生講演会『カナダにおける民主主義と政治文化』を開催して 福士 純

2026年4月25日に青山学院大学にてトロント・メトロポリタン大学のダン・ホーナー先生を招いての講演会『カナダにおける民主主義と政治文化』が開催された。ダン・ホーナー先生は、19世紀の都市史を専門とする歴史家であり、公共秩序、移民、ガバナンスに関わる諸問題を主たる研究領域としている。これまでに、19世紀のモンリオールにおける集団暴力や疫病を主題とする多数の学術論文および書籍を刊行され、彼の主著である *Taking to the Streets: Crowds, Politics, and the Urban Experience in Mid-Nineteenth-Century Montreal* (Montreal and Kingston: McGill-Queen's University Press, 2020) は、ケベック史に関する最優秀図書として、カナダ歴史学会 (Canadian Historical Association) のクリオ賞を受賞 (2021年) している。

本講演会開催の経緯としては、2025年秋に当方が現在共同研究を行っている東京大学の勝田俊輔先生のところにホーナー先生から2026年春に来日の予定があるが、その際日本のカナダ研究者との交流の機会を持ちたい旨の連絡があり、当方が勝田先生に代わって何らかの会を設けたいと計画を始めることとなった。ただ、当方が主催として会を開催するよりもより広くカナダ研究者に集ってもらうことを考えて、青山学院大学の宮澤淳一会員にお願いをして関東地区研究会との共催にて講演会を開催することとなった。加えて、同じく青山学院大学の飯笹佐代子副会長のご尽力にて、青山学院大学総合文化政

策学会のご支援もいただくたちで講演会を開催することが出来た。当日は、青山学院大学総合文化政策学会のご支援によって逐次通訳者を付けての講演を行うことが出来たこともあり、学部学生の参加者も含めて30人近い参加者が集まる盛会となった。

当日のホーナー先生の講演は、以下のようなものであった。「人民の声とは？民主主義の不安定化が進む新時代におけるカナダ民主主義の論争の根源に関する再検討」と表題が付けられた本講演では、19世紀半ばのカナダにおける民主政治の形成過程を題材としながらも、現代の民主主義が直面している危機についても示唆を与えることをその講演の目的としたものであった。一般に、カナダは穏健で安定した民主主義国家として知られている。しかしホーナー先生は、そのイメージとは対照的に、カナダ民主主義の成立が激しい対立、暴力、民族的緊張のなかで進められたことを解明しようとする。

講演の中心となるのは、1849年にモンリオールで起こった「反乱損失補償危機 (Rebellion Losses Crisis)」とその後の議事堂焼き打ち事件である。当時の連合カナダ植民地では、イギリス系プロテスタントを中心とするトーリー党と、フランス系住民やアイルランド系カトリックなどを支持基盤とする改革派が激しく対立していた。トーリー党は、王冠への忠誠と植民地支配層の権威を重視し、自らをイギリス帝国の正統な守護者とみなしていた。他方、改革派は選挙によって選ばれた議会こそが政治権力を担うべきだと主張し、「責任政府」の実現を求めていたのである。

そのような中で行われた1848年の選挙にて、カナダ全土の有権者は改革派が多数を占める政府を選出した。この選挙期間中に、彼らが掲げていた公約の一つが、1837年および1838年の反乱によって被害を受けた、モンリオール周辺農村部の土地所有者に

補償を行うことであった。改革派政権はこれを穏健な行政措置として提起したが、これにトーリー党は補償を「反逆者への報酬」とみなして猛烈に反発した。彼らの目には、これは女王に対して反乱を起こした人々そのものに補償金を支払う行為にほかならなかったからである。こうした緊張が頂点に達したのが1849年であった。改革派政権は、先の反乱で被害を受けた人々への補償法案を成立させようとした。トーリー党員は、総督エルギンが法案を拒否すると信じていたが、総督はこの法案を承認した。これは、選挙で選ばれた議会の意思を尊重する「責任政府」の原則が勝利した瞬間だった。しかしその勝利は、民主主義の成熟を意味しなかった。怒ったトーリー党支持者は街頭に集まり、憤激する群衆は議事堂へ向かって行進した。やがて建物への投石や乱入が始まり、最終的には議会が置かれていたセント・アンズ市場の建物が放火され、炎上した。英領北アメリカ植民地政府の象徴ともいえる議事堂は焼失し、その後もモントリオールでは暴力的衝突が続いたのである。

ここからホーナー先生は、過去の歴史的事例の分析から得られた知見を元に視座を現在へと拡張、その問題意識を現在の問題へと架橋する。その際特徴的であるのは、彼がこの1849年のモントリオールの事件を2021

年1月6日のアメリカ連邦議会議事堂襲撃事件と比較しているという点にある。選挙結果に不満を抱く支持者は、扇動的な言説によって動員され、議会へ向かって行進し、建物を占拠しようとする——その構図には1849年のモントリオールの事例と驚くほど多くの共通点があると彼は指摘する。彼は、民主主義の危機を現代特有の現象として理解するのではなく、むしろそれを民主主義そのものが本来抱えてきた不安定性として捉えるべきだと説くのである。

本講演において興味深い点は、ホーナー先生がこの対立を単なる政策論争としてではなく、互いに異なる「民主主義観」の衝突として描いている点である。トーリー、改革派両者ともに自らを真のイギリス的なリベリズムの継承者と考えており、その正統性をめぐる争いが社会全体を巻き込んでいったのである。新聞、友愛団体、講演会などから成る公共圏が形成され、人々は政治を熱心に論じた。しかしその活発な政治文化は、同時に暴力とも隣り合わせだった。

こうした対立は、当該期における選挙制度によってさらに拍車がかけられていた。投票は秘密ではなく、支持候補を口頭で宣言しなければならなかった。投票所の周囲には群衆が集まり、対立陣営の有権者を威嚇することも珍しくなかった。選挙期間中には乱闘や発砲事件まで発生し、民主主義は理性的な討論の場というより、身体的な暴力がむき出しになる舞台でもあった。さらに女性、貧困層、先住民の多くは政治参加から排除されており、「民主主義」と呼ばれる制度が決して万人に開かれたものではなかったことも指摘される。

ホーナー先生の講演を通じて浮かび上がるのは、民主主義は決して



講演会時のホーナー先生（筆者撮影）

完成された制度ではなく、常に対立や分断と格闘しながら維持される繊細な仕組みだという認識である。私たちはしばしば民主主義を理性的で安定したものとして理想化しがちだが、実際には暴力、排除、偏見がその形成過程に深く組み込まれていた。だからこそ現在の混乱も、民主主義の終焉の兆候というより、民主主義が本質的に抱える緊張関係の新たな表れとして理解すべきと言えるだろう。本講演は、1849年のモントリオールの議事堂焼き打ちという歴史的事件に着目することで、「民主主義とは何か」という重要な問いを投げかける非常に興味深い内容であった。それは、歴史研究の成果を現代社会の課題へと結びつける見事な試みであり、民主主義の未来を考えるうえで多くの示唆を与えてくれる講演であった。

なお最後に、先にも述べましたが、本会の開催にあたってご尽力くださいました宮澤会員、飯笹会員ならびに青山学院大学総合文化政策学会の皆様へ、心より感謝申し上げます。

(東京経済大学)

＊

＜コラム＞ “道楽” としてのカナダ研究 ーある歴史画への眼差し

竹中 豊

2017年3月、現役を引退した(そのとき72歳)。競争的アカデミズムから解放された気持ちは、何とも心地よい。そう感じたら、いままでキョロキョロしていた自分が可笑しくなった。これからは《閑雅にして悠なる文人》・・・とまではいかずとも、世の片隅で隠れて暮らそうと思った。でもその一方、チョット待てよ、“道楽”としての知的遊戯があったっていいじゃないか、と小癪にも思い直した。

そこで、現役時代から気になっていたテーマの一つ、すなわち絵画作品を通してカナダ史の断面を再考して見てみよう、と愚考した次第。これは老残の身の悪あがきではありませ

ぬ。この小文が、余生安穩のなかの戯言であるかもしれないことをお赦してください。



歴史画としての*The Death of General Wolfe*とは？



図1 Benjamin West作 *The Death of General Wolfe* (1770)

この作品の舞台はケベックのアブラハム平原だ。そこは、北米における最後の英仏植民地戦争(フレンチおよびインディアン戦争)の決戦場だった。1759年9月のことだ。周知のように、結果はイギリス軍が勝利し、それに続くカナダ史の基調は、ケベックのフランス的事実を温存しつつも、イギリス領北アメリカとして展開していく。その意味で、このアブラハム平原の戦いは、カナダの運命を決定づける最大級の歴史的ハイライトだった。

おのずと、この作品のもつ意義とは、歴史的的重大場面の描写とその芸術的技巧性にあるだろう。描いたのは Benjamin West (1738-1820)。この画家については後述する。同作品の主題は、勝者であるイギリス軍の指揮官で陸軍将校 James Wolfe (1727-1759) がアブラハム平原で戦死する場面(9月13日。享年32)という、そのドラマティックな状況描写にあった。ついでに言えば、対するフランス軍の総司令官 Louis-Joseph de Montcalm (1712-1759) も負傷して、翌9月14日に戦死する(享年47)。かくして、歴史家、とりわけ多くの美術史家たちが、好んでこの作品を論評してきた理由もうなづける。



The Death of General Wolfeを 解釈すると・・・

では作品内容を多面的な視点から見てみよう。まず第一に、画面中央の”主役”であるWolfeの《描かれ方》について。これは、母国を遠く離れた北米の地で戦ったイギリス人将校の最期の姿、として表現される。苦悶する顔、しかしそれは、イギリス人の勇者の姿でもあったことが強調される。服装は軍服らしからぬ印象だが、真っ赤な色はイギリス性を際立たせるための美的演出であろう。

同時に、戦場で横たわるWolfeの死去の姿は、そのイメージの源泉をたどると、十字架に磔となって死んだイエス・キリストの最期の光景と重なる。美術史において、降架したキリストの死去の姿は、時代を超えてさまざまな名作として登場する。その典型は、たとえば図2のバロック期フランドル出身のAnthony van Dyck(1599-1641)作《デポジション》(1634)に見ることができるだろう。あるいは、彫刻だが図



図2 van Dyck作 (1634)



図3 Michelangelo作 (1498-1500)

3のMichelangelo di dovico Buonarroti Simoni(1475-1564)の有名な《サン・ピエトロのピエタ》(1498-1500)にうかがうこともできる。後者では、キリストの亡骸を抱え悲嘆にくれる聖母マリアも重要モチーフとなっている。

そこに共通するのは、ダラリと右手をたれ下げて横たわっている受難者キリストの死の光景だ。先人にみるこうした“伝統的な”最期のキリスト像は、作者であるWestにとっても決定的に重要な創造的インスピレーションの原流だったろう。

第二は、この作品に敢えて《先住民》を登場させている点だ。おのずと、作品の鑑賞者にとって、舞台はヨーロッパでないことがわかる。だがもっと重要な点は他にある。この先住民のポーズを見ると、腕を曲げて顎に手をあて、明示的に《考える人》として表現される。こうしたポーズは、西欧美術史では伝統的に”思慮深い”姿を象徴し、高貴なるイメージをより明白に視覚化している。先住民はけっして歪められ、非文明的かつ劣った人間ではなく、実はヨーロッパ人よりもはるかに温和な人たち・・・という暗喩を秘めているのである。よく見ると、この先住民はヨーロッパ人同士の戦いをなんと愚劣なもの、として傍観しているようにさえ思われる。先住民を《Noble Savage》とするイメージがここで強調される。

そして第三は、この作品に登場する人物の《史実》についてである。画面ではWolfeを除いて合計13名が登場するが、後世の歴史家たちの緻密な研究によると、Wolfeの死に際に寄り添っていたのは実際には3名だったとされる。しかも、戦場であるにもかかわらず、帽子をかぶっているのはたった1人だ。これはいかにも不自然だが、視覚的・美学的効果を演出しているのだろう。また、13名の個々の名前は(ここでは省略)すべて判明しており、イギリス軍の幹部や本国の名士たちを意図的に登場させている。それによって、この歴史画の”格”を高めることに貢献していると思われる。



The Death of General Wolfe の独自性・類似作品の登場

この作品のユニークさは何か。その一つは、西欧の伝統的美術史の固定観念から離脱して描かれている点にある。すなわち作品のモチーフが、画家Westの生きた《同時代史》を対象としていることだ。同作品は1770年に制作され、その翌年、ロンドンの由緒あるRoyal Academy展で発表されたのだが、従来から、また風習として、画家の生きた《同時代》を描く作品は、格式が低いとされていた。ジャンルでいうと古代ギリシャ時代の神話やローマ時代の物語を描く《歴史画》こそ格式が高いとされていたのである。もちろん、聖書の物語をモチーフとした《宗教画》もそれに該当していた。

しかしこうした慣習と先入観から脱却し、技巧とともに質的転換を示したのが、*The Death of General Wolfe*だった。少なくともこの作品に関する限り、美的思考の軸を変えたのだ。「アブラハム平原の戦い」から11年後に描かれたとはいえ、この作品は慣習に反し、まさしく“現代もの”だった。

第二に、画家Westの《想像力》が史実を越えて優先されていることだ。状況の事実だけの描写であれば、それは無機質的な documentary か topography にすぎないだろう。しかしこのWestの作品には、私見ながら、鑑賞者の想像力を膨らます感性と表現力が感じられる。すなわち豊かなイマジネーションに裏付けられた《物語性》を秘めているのである。それを《歴史の作為》と言ってしまえば味もそっけもないが、しかし画家は歴史学者ではない。

そして第三に、この作品の歴史における意味の重要性和価値を高めるかのように、後年、同名の類似作品がいくつも制作される。イギリス人銅版画家William Woollett(1735-1785)の作品(図4)、あるいは1785年のフランス人Louis-

Joseph Watteau(1731-1798)の作品(図5)などが、その好例だろう。そのヴァリエーションは、前者ではWolfeの着衣の色は赤でなくブルーとなっている。先住民の体には目立つように入れ墨が描かれる。また後者では技法も異なり、カラフルな色彩を用いず単色の浅彩画法で表現される。



図4 William Woollett 作 (1776)



図5 Louis-Joseph Watteau 作



画家Benjamin West

最後に、Westの人物像について少し触れてみよう。Westはカナダ人ではない。フィラデルフィア州出身のアメリカ人だった。クエーカー教徒の裕福な家庭に育ち、子供のころから画才に秀れたこともあつてか、彼は特定の美術学校で修業したわけでない。ただ、若きWestが画家として大きく成長することになった契機は、1760年から3年間、イタリア・ローマでの滞在だった。この体験は、彼にとって伝統あるヨーロッパ美術を学び、その神髄に触れ、そして美的感性を磨くうえで決定的に重要な役割を果たした。

ローマ滞在後、彼は才能・人格、そして人脈に恵まれたこともあり、生活と活動の拠点

をロンドンに移す。格式高いRoyal Academy of Artsの創設に加わり、後年、会長職にも就く。こうして彼はイギリス社会に深く足を踏み入れ、画家としての基盤と名声を確実に固めていき、ついにイギリス画壇の中枢にまでのぼりつめたのだった。帰化してイギリス人となっていたのは自然であった。

ところで、*The Death of General Wolfe*はたしかにWestの最大傑作ではあるが、この作品がひとり歩きしている感が無きにもあらずである。というのは、彼は自画像をふくめて生涯に400点を超える作品を制作しており、《同時代もの》以外にも、イタリア美術の影響を受けたこともあって、キリストを題材とした《宗教画》や《歴史画》といった伝統的モチーフをも、多く制作していたのである。また、イギリス王室の“お抱え画家”として、図6の*Portrait of George III*のようにRoyal Familyの肖像画をいくつも手掛けている。その意味で、彼は画家としてのみならず、世俗的成功者でもあったといえるだろう。

総じて彼の画風には、大袈裟で芝居がかった描写、感情や情熱のほとばしるバロック風絵画でなく、どぎつさを抑制する落ち着いた感じが感じられる。底流には、無鉄砲な過剰さを嫌う伸びやかな心情があるのかもしれない。



図6 West作 *Portrait of George III*



図7 West 作 *Self-Portrait*(1819)

とは言うものの、結局、この小文は、《私はこんな風にしか見れなかった》・・・という赤面の証であることを、重ねて申し添えておきます。

《絵は無声の詩 詩は有声の絵》

(読ミ人知ラズ)

(日本カナダ学会名誉会員)

* * *

(((事務局より)))

◆第51年次研究大会のお知らせ

2026年9月12日(土)・13日(日)、愛知大学にて第51回年次研究大会が開催されます。プログラム・報告要旨集につきましては、学会HPよりご覧下さい。

◆「トラベル・グラント」募集について

2026年度(2026年4月1日～2027年3月31日)までの間に、カナダおよびカナダ以外の国(日本を除く)で開催される国際会議などでカナダ研究について報告をする本学会会員に旅費一部補助の制度です。本学会会員によるカナダ研究の成果を広く海外に発信し、研究の交流や国際化を図るのが目的です。ただし、トラベル・グラントは旅費の一部を補助するのが趣旨ですので、旅費のすべてをカバーするものではありません。募集要項は次のとおりです。(1) 支給金額：上限10万円とする。(2)

支給対象者：募集時点において日本カナダ学会会員であること。原則として、専任の勤務先を持たない会員。専任の勤務先を持つ会員でも応募出来ますが、優先度は低くなります。(3) 応募書類：① 本学会所定の応募用紙(日本カナダ学会のホームページに掲載)、② 国際会議などでの報

